

<書 評>

石井美樹子

『マリー・アントワネット：
ファッションで世界を変えた女』

(河出書房新社, 2014 年, 235 頁)

軽 部 恵 子

本書は、フランス革命期の 1793 年 10 月、断頭台の露と消えた元フランス王妃マリー・アントワネットの生涯を、彼女のファッションをめぐるエピソードを交えて描いたものである。

著者の石井美樹子は 1942 年に生まれ、津田塾大学学芸学部英文学科を卒業し、1974–1978 年にケンブリッジ大学大学院で中世英文学と演劇を専攻した。その後、神奈川大学で教鞭を執り、現在は同大名誉教授である。著者にはルネサンスとシェイクスピア、テューダー朝に関する著作が多く、『中世劇の世界：よみがえるイギリス民衆文化』（中央公論社、1984 年）、『薔薇の冠：イギリス王妃キャサリンの生涯』（朝日新聞、1993 年）、『イギリス・ルネサンスの女たち：華麗なる女の時代』（中央公論社、1997 年）、『イギリス中世の女たち』（大修館書店、1997 年）、『ルネサンスの女王エリザベス：肖像画と権力』（朝日新聞社、2001 年）、長年の研究成果をまとめた大著『エリザベス：華麗なる孤独』（中央公論新社、2009 年）などがある。

著者は 3 年前に『マリー・アントワネットの宮廷画家：ルイーズ・ヴィジェ・ルブランの生涯』（河出書房新社、2011 年、275 頁）を上梓した。豊富な史料を元に、フランス王族の側に仕えた人物を描きながらフランス近世史を描くことに成功した。評者も、同書を書評「石井美樹子『マリー・アン

トワネットの宮廷画家：ルイズ・ヴィジェ・ルブラン夫人の生涯』（河出書房新社，2011年，275頁）」（『人間科学』第44号（2012年3月））で取り上げた。この本の出版のため，著者がフランス革命について史料にあたる中，元王妃の周辺にいた人々の声から「自墮落で浮薄で，国家のお金を衣装と宝飾品に湯水のように使いフランスを破滅させたという従来のマリー・アントワネットのイメージとは全く異なる」（石井，2014，p.12）ことに気づき，ルブラン夫人の制作した王妃の肖像画に込められた歴史的意味を考察し始めたと言う（同，p.13）。今般，著者は執筆にあたって，マリー・アントワネットの朗読係だったカンパン夫人の回想録，王妃の髪結いを20年間務めた美容師の回想録，フランスに嫁ぐ以前から親交のあった男爵夫人の回想録，そしてマリー・アントワネットと母マリア・テレジアの10年間にわたる往復書簡を精査することで，歴史上あまりにも有名なフランス王妃に新たな光を当てようと試みた（p.23）。

マリー・アントワネットに関する作品は，オーストリアの作家シュテファン・ツヴァイク（Stefan Zweig, 1881-1942）の『マリー・アントワネット』に依拠したもの，あるいは影響を受けたものが少なくない。概して，主人公像は，愛らしいが勉強嫌いで，自分の言動がどういう影響を周囲にもたらすか思慮の足りない少女である。わずか14歳でヴェルサイユ宮殿に輿入れすることになり，母は娘を心配して，フランスに出発する直前は一緒に部屋で寝起きし，未来のフランス王妃となるための心得を説いたと言われている。しかし，著者は本書の各所で，駐仏オーストリア大使メルシー伯爵らの書簡を引用し，浪費家で思慮不足と言うマリー・アントワネットのイメージを変えようとしている。

オーストリア生まれの垢抜けない皇女をヨーロッパ随一のファッション・リーダーに変身させたのが，王妃の「ファッション大臣」こと，ベルタン（Rose Bertin, 本名Marie-Jeanne Bertin, 1747-1813）であった。彼女は第三身分（平民）出身ながらマリー・アントワネットに拔擢され，王妃が貴婦人たちを魅了し続けるための演出を担った。また，オートクチュールの基礎

を築き、ファッションをアートにまで高めたと評価される。

ベルタンは女性史の点からも興味深い存在と言えよう。自身で築いた財産が「夫」によって管理されるのを防ぐため、生涯未婚を通したからである。周知のとおり、フランス人権宣言には女性の権利が書かれていなかった。ちなみに、マリー・アントワネットのお気に入りの肖像画家、エリザベス・ヴィジェ・ルブラン夫人は、母親の再婚相手から逃れるために年上の画商ルブランとの結婚を選んだが、革命勃発後に一人娘を連れてヨーロッパ大陸を放浪するようになると、フランスに残した財産を夫の管理下に置かざるを得なかった。

さらに言えば、ベルタンは丸顔で、決して美人ではなかった。ルブラン夫人はロンドンのナショナル・ギャラリー蔵の自画像からわかるように、かなりの美人だったのと対照的である。もっとも、お針子から身を起こしたベルタンがルブランのような容貌に恵まれていたら、遅かれ早かれどこかの貴族の愛人となり、最後は捨てられ、生活のためにパリの路地で売春婦になっていた可能性が高かったと言う（ミシェル・サポリ著、北浦春香訳『ローズ・ベルタン：マリー＝アントワネットのモード大臣』、白水社、2012年、p. 15）。

話を本書に戻そう。本書は「序章 王妃のマネキン人形は宇宙を支配する」、「第一章 統治権を持たない王妃」、「第二章 フランス人形の旅立ち」、「第三章 コルセット戦争」、「第四章 男装の麗人」、「第五章 ファッション・リーダー」、「第六章 シミーズ・ドレス姿の王妃」、「第七章 ヴェルサイユ宮殿、最後の輝き」の全8章から構成される。そのほか、「おわりに」、「註」、「参考文献」が付記されている。

ルイ14世の築いたヴェルサイユ宮殿では、儀式はもとより、食事、着替えに至るまで事細かなルールが決められていた。一方、堅苦しくないシェンブルン宮殿で育った王太子妃（著者は「皇太子妃」と記述）は、ヴェルサイユ宮殿のしきたりになかなか馴染めなかった。彼女が前の部分に鉄の紐がつき、身体を拘束する礼装用のコルセット「グラン・コール」を着用せず、

宮廷に騒動を巻き起こしたことがあったが、裏では義理の叔母アデライード王女が唆していた (p. 91)。王太子妃付きのノアイユ伯爵夫人が、コルセットを着用しないことを叱責するようルイ 15 世に懇願し、国王は取り合わなかったものの、宮殿では王太子と王太子妃の「婚姻の無効」を取りざたする者まで現われた (pp. 93-94)。

それから、髪型は人の運命を大きく変える。卑近な例では、1980 年代にアイドル歌手として歌謡界を席卷した松田聖子の「聖子ちゃんカット」があげられよう。新たな髪型を創造した美容師は、たちまち時代の寵児になる。マリー・アントワネットの場合、それは 1746 年生まれのレオナル・オルティエであった。彼はパリの劇場に出演する踊り子の髪を結って一躍有名になったが、その後オペラ座のプリマドンナの他 10 人以上の女優の髪を結い、ヴェルサイユ宮殿に呼ばれるまでになった (pp. 125-127)。

実は、王太子妃にベルタンを紹介したのはこのカリスマ美容師であった。その時点でマリー・アントワネットはベルタンの評判をもう耳にしていたが、最初の取引で異例にも 2 万リーブル相当の品をベルタンの店で誂えた (p. 136) のは、お気に入りの美容師の推薦を信頼してのことに違いない。

オルティエの偉大さは、髪型で王妃をヨーロッパに「君臨」させただけではない。1789 年 7 月の革命勃発後も国王一家に仕え続け、彼らの国外逃亡計画まで打ち明けられていた。1792 年のヴァレンヌ逃亡事件で国王一家が逮捕されると、自身はルクセンブルクに亡命し、回想録の執筆を始めた。1814 年、王政復古後のパリに戻り、1820 年 3 月 24 日に死去している。

ところで、いつの時代も、娘がファッションに熱を入れすぎると母親は心配する。フランス王妃の肖像画を見たオーストリアの女帝は、1776 年 5 月 30 日付の書簡で娘に対し、「あまりに派手な装いなので、王妃であり、わたしの娘であるあなたが、このように装っているのを信じられません」と小言を述べた (p. 165)。娘は、自分が同じ年頃の女性たちと比べて、衣装も飾りも同じようなものを身につけており、ほお紅は年配の女性より薄い方だと反論している (p. 166)。母と娘のやりとりは微笑ましいが、当事者たちは

極めて真剣だったに違いない。

評者にとって最も興味深かったのは、第6章のシミーズ・ドレスである。服装は、当人の意思や意図を越えて思わぬ反応を招く。コルセットを付けないシンプルなドレスは、思想家ルソーの「自然に帰れ」に呼応する田舎風スタイル (p. 180) であったが、プティ・トリアノン宮殿に王妃が造成させた人工の農村も同じくルソーの思想に影響されていた。1783年に、マリー・アントワネットはベルタンに制作させたシミーズ・ドレス姿でヴィジェ・ルブラン夫人に肖像画を描かせ、絵画がサロンに展示されると「シミーズを着るほど落ちぶれた」など、王妃は非難を浴びせられた (pp. 174, 181)。と同時に、王妃の簡素なドレスを真似る宮廷人とブルジョワ階級が現われた (p. 174)。

やがてシミーズ・ドレスはイギリスやヨーロッパ大陸に広まっていく。そのきっかけの1つは、王妃が懇意にしていたデヴォンシャー公爵夫人ジョージアナにシミーズ・ドレスを送り、公爵夫人がそれを着て音楽会に現われたことであった (p. 182)。ジョージアナは2008年のイギリス映画「ある公爵夫人の生涯」(原題The Duchess)の主人公で、イギリス出身の人気女優キーラ・ナイトレイ (Keira Christina Knightley, 1985-) が演じたから、その名を聞いたことのある読者も多いであろう。

21世紀でも、女性のファッションで本人はもちろん、夫のイメージまで大きく変化する例は多い。たとえば、オバマ大統領の夫人ミシェル・オバマは、中程度の価格のブランド品を自分流に颯爽と着こなす術に長けている。2012年8月、ロムニー元マサチューセッツ州知事の夫人エリザベスが約2000ドルの真紅のドレスを着、共和党全国大会に現われ、夫を大統領候補に指名するよう応援演説を行った (InStyle.com, “Ann Romney wore de la Renta at the Republican Convention,” Today, August 29, 2012, http://thelook.today.com/_news/2012/08/29/13548691-ann-romney-wore-oscar-de-la-renta-at-the-republican-convention?lite, last accessed January 18, 2013)。ドレスは大統領(候補)の夫人がよく用いるブランド「オスカー・ド・ラ・

レンタ」(Oscar de la Renta)で、その意味で決して高すぎる価格帯ではなかった。また、赤は共和党のシンボルカラーである。一方、2012年9月、民主党全国大会に夫の応援演説のため登壇したミシェル夫人は、アフリカ系アメリカ人の若いデザイナー、トレイシー・リース(Tracy Reese)が制作した価格が500ドルでピンク色のドレスを颯爽と着こなし、大いに注目された(Rachel Elbaum, "Tracy Reese: Michelle Obama's DNC dress will hit shelves," Today, September 6, 2012, http://thelook.today.com/_news/2012/09/06/13703094-tracy-reese-michelle-obamas-dnc-dress-will-hit-shelves?lite, last accessed January 18, 2013)。ミシェル夫人の着こなしは、有権者のオバマ大統領に対する親近感を増加させただけでなく、ロムニー候補を「中産階級の気持ちがわからない大金持ち」と印象づけるオバマ陣営の戦略に少なからず貢献したのではないかと推察される。

また、イギリスの王位継承第2位であるウィリアム王子の妻キャサリン妃は、結婚前から日本円で5万円程度のブランド品を着こなす術に長けていた。ケンブリッジ公爵夫人が着こなす既製のドレスやスーツは、たちまち売り切れると言う。思い起こせば、ウィリアム王子の母である故ダイアナ元皇太子妃は、1980年代にイギリス人デザイナーによるドレスで数々のイベントに出席し、イギリス・ファッション業界のイメージを刷新した。ファッションはいつの時代も世界を変える力を秘めている。

以上のように、本書はマリー・アントワネットの生涯を今までと異なる視点から考察したい読者にとって非常に役立つものである。ファッションが政治に果たす役割は、テレビとインターネットが普及している21世紀において、フランス王妃の時代よりさらに大きくなるであろう。それから、フランス革命について教える者には、興味深い歴史のこぼれ話とトリビアを多数提供してくれる。文体が小説風なので引用には注意が必要だが、註と参考文献が豊富なのがありがたい。

最後に、本書を読む人には、ローズ・ベルタンの生涯を描いた前述の『ローズ・ベルタン：マリー＝アントワネットのモード大臣』(原題Rose

Bertin: Couturière de Marie-Antoinette) を併読するよう強く勧めたい。第三身分のベルタンがファッションの力で期せずして身分社会を破壊していく過程は実に痛快だし、請求書の金額から当時の経済状況をうかがい知ることができる。ベルタンは花柄の美しい衣装をロシア大公妃マリア・フョードロヴナ（ロシアのエカテリーナ 2 世の息子、パーヴェル大公の妻）に提供したが、パリの豪華な衣装は以前から関係のよくなかった義母の不興を買い、女帝は婦人の衣装、髪型などを規制することで、息子夫婦に政治的メッセージを送った（同、pp. 62-63）。何より、サポリの著作にはフランス革命の「後日談」が描かれている。1793 年 2 月、ベルタンはイギリスに亡命し、1795 年 2 月に帰国を果たした。元王妃と取引のあったファッション関係者の中には、ナポレオンの皇后ジョゼフィーヌに作品を納入するようになった者もいたが、ベルタンだけは復活できなかった。それは、彼女と王妃の結びつきがあまりに強かったためである。1813 年 9 月 21 日、66 歳のベルタンは、オーストリア皇帝フランツ 2 世（マリー・アントワネットの甥）の娘マリー・ルイーゼをサン・クルー公園で偶然見かけ、心痛から危篤に陥り、翌朝心臓発作で亡くなった（同、pp. 184-185）。世界を変えた王妃とファッション・クリエーターの物語が終わった瞬間であった。